

第10回 仕事(働く)とは何か (2026.09.26 開催)

<概要をまとめる意義>

以下、今回の哲学カフェの内容について概要をまとめる。

これは議事録ではない。迷ったら何度もここに立ち返り、その内容を容赦なく批判し、議論しなおし、更なる”問い”の根源へ一歩でも近づくための手掛かりとしてほしい。

<仕事(働く)とは何か >

今回の議論で私が想像していたのは、社会への効用感をどう生み出すか、というテーマを軸に議論が展開するというものだった。しかし、参加者には学生から、中堅層、そしてリタイア後の世代まで幅広い年代の方が集まり、それぞれの時代の視点から多角的に仕事というものを考えることができた。就職未経験の立場から見れば、仕事とは未知の領域への一歩であり、限られた類似の経験(アルバイト、ゼミの学外活動等)と誰かの庇護を頼りに進んでいくしかない。中堅層での仕事は、自分の仕事との向き合い方を再定義する時間でもある。仕事の責任も増える一方で、身体的衰え、家庭での役割、人生の天井感など仕事以外の命題も多くなる。リタイア後の世代はどうだろうか。ここでは、仕事の目的は、より多くの給料を得ることではなく、社会と緩くつながりを持つことで孤独、あるいは圧倒的な暇というダメージから人生を守る方向へシフトする。同じ会社に所属していても、年代が変わるだけで仕事に対する価値観はこれだけ多様である。では、それに対して組織の在り方や働きかたの在り方はどれほど対応できているのか。残念ながら、多くの職場では形骸化・硬直化した制度も多く、働くことの自由さを失っているように見える。「この作業は何のためなのか」「もっとこうの方がいいのではないか」そんな気づきから仕事の身体化は始まる。しかし、実行してみたところで多くはただの徒労に終わるかもしれない。「そんなことは無謀だからやめておけ」「ほらやっぱり失敗した」と陰で言われるだけかもしれない。しかし、ここで思い出してみたい。子供の頃そんな忠告でやめたことがあっただろうか。思いのままにやってみて失敗を重ねて、経験を自分の血肉にしていく。今回の議論を通じて、年齢を重ねても仕事を好きでいられる人には、一つの共通点があるように感じた。それは、「仕事」と「遊び」を近づけることができた人である。遊びには、自分で試し、失敗し、また試すという自由がある。そこでは効率や正解だけではなく、「やってみたい」という身体的な情動が行為の出発点になる。仕事の中にそうした遊びの要素を取り戻すことで、仕事はただ与えられるだけの作業から、自分の身体感覚に根差したものへと変わっていく。その過程を通してこそ、仕事をより自分自身のものとして感じるができるのではないだろうか。そのようにイキイキと仕事をする人はどこか輝いて見える。あなたの周りには、仕事をしながら輝いている人はいるだろうか。

<“仕事(働く)”を読み解くキーワード>

・昔:仕事=生存 → 今:仕事=よき遊び ・身体感覚と遊び ・その仕事に満足感や充実感はあるか？

これらのキーワードから、新たな”問い“へ変換した。

<新たな問い>

- ・仕事から経済感覚を抜いて、共同性を軸に語れるか？
- ・仕事の感覚から我満を抜いて、自分、家族、地球に喜びをもたらすものとはできないのか？